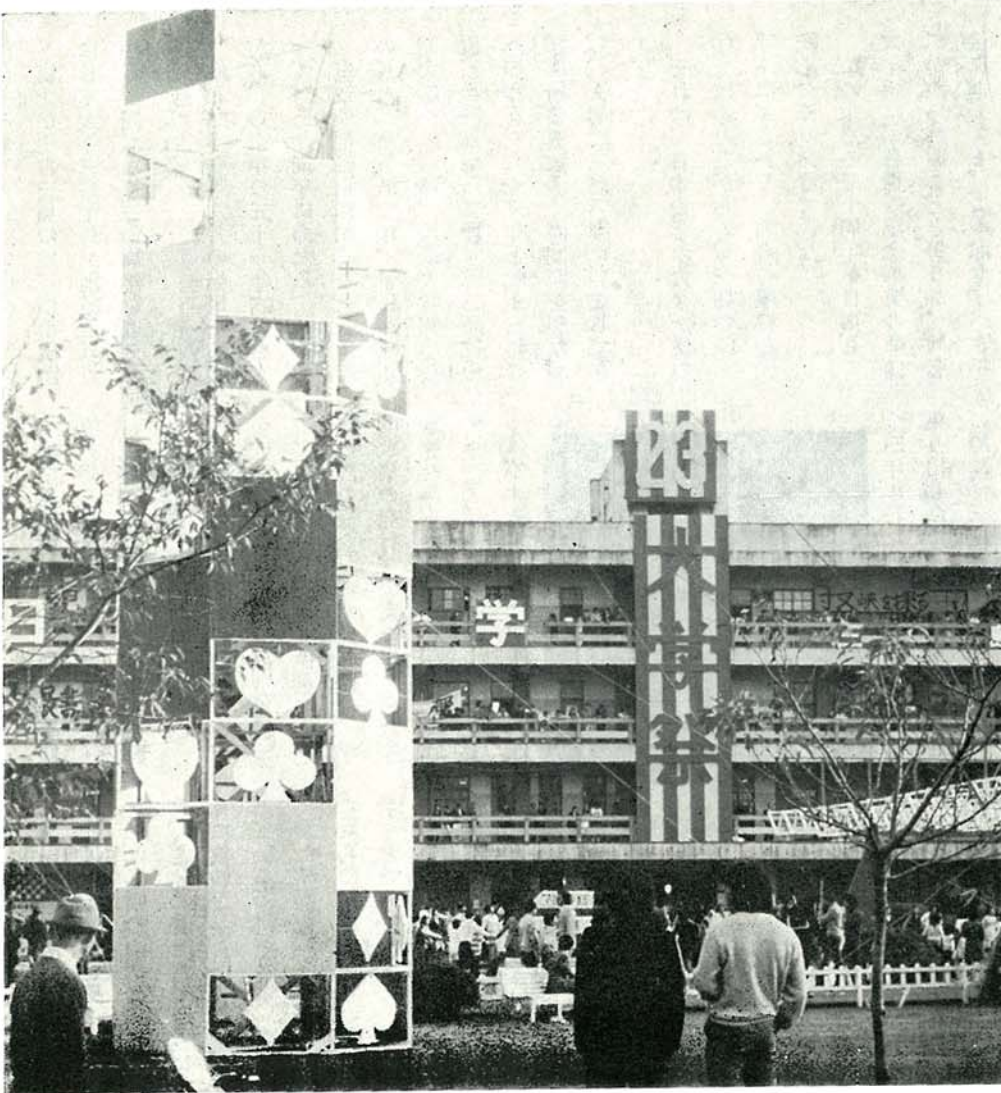


日本大学 三島 同窓会々報

第 4 号

昭和49年11月3日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行



第23回大学祭

昭和四十八年度総会開催

— 百二十余名 あつまる —

日本大学三島同窓会昭和四十八年度総会並びに懇親会は、十一月三日午後四時より、三島学園記念館に百二十余名の会員を集めて盛大に開催された。

総会は種房繁会長の挨拶の後、奥田吉郎氏を議長に選任し、議事に入り、次の事項を可決した。

- 一、前年度事業報告について
- 二、前年度決算報告について
- 三、本年度事業計画について
- 四、本年度予算について

(以上六頁参照)

一、その他

小委員会を設置し、会の運営を円滑に行なうことになり、奥田吉郎、宮沢主計、遠藤逸雄、西村満男、瀬川一男、石川貞夫の諸氏が選出された。また、この委員会には必要に応じ短大各科の代表も出席されることができたことになった。

なお、同委員会に一任された事項として、奨学金並びに同窓会賞の取扱い問題、学園歌集発行、同窓会報発行等があり、この他に名簿確認事業の検討等がある。

懇親会は総会に引続いて鈴木、安藤、玉津三先生をはじめ二十数名の先生方を迎え、行なわれた。とくに本年は若手同窓生の多数出席が見立った。会は午後七時近くまで続き、終って古手グループの恒例の桜家をはじめ各グループに分れて二次会に繰り出し、三島市内の夜のにぎわいは同夜半過ぎまで続いた。

奨学金増額!!

新たに同窓会賞設置

従来は短大卒業生に対しても奨学金制度を適用していたが、受賞

後社会に出る者もあり、三島学園の実状にあわなくなったので、かねて大学からの要望もあり、奨学金と同一条件で、短大各科の卒業生のうち最優秀な者に對し、卒業式当日同窓会賞を贈って表彰することになった。なお、奨学金制度も併用されるので各科いずれか一つが贈られることになる。

表彰は短大関係は三月二十四日卒業式場で、学部教養課程関係は四月十日入学・開講式場でそれぞれ行なわれたが氏名は次の通りである。

○奨学金

商経科(一部)

法学部(経法)

経済学部(商経)

商学部(経営)

○同窓会賞

文科(国文)

文科(英文)

商経科(二部)

家政科(家政)

家政科(食栄)

工科(建築)

藤本 哲生

望月 政治

杉山 謙

大島 久和

丸山 晴美

野田 裕子

伊藤 勝巳

湯山 佳津江

前島 具美

溝口 隆弘



奨学金を受ける望月政治君

富士を望む三島の地、旧重砲跡に日本大学三島予科が創設されてから、間もなく三十周年を迎えようとしている。

昭和二十一年六月の発足であるから、再来年の五十一年六月をもつて、三十周年にあたる。

戦後の混乱期に始まり、三十年の長きに渡る歴史は、予科から新制大学への改革、短期大学部の設置、教養部から文理学部三島校舎への移行、二十三年と四十三年の学園紛争等数多くの問題を経ながら、次第に三島学園を形成してきた。

それは、日本大学の大きな懐の中ではありながらも、三島学園と呼ぶにふさわしい独自の環境と伝統をつくりあげてきた。

この栄ある三十周年を目指して大学では、各種の記念事業の準備にかかられることと思うが、同窓会においても、この記念すべき年を目標にして、同窓会の充実をはかり、新しい発展のよすがとしたい。

三島同窓会は、玉津徳太郎教授の指導、鈴木昇六顧問の支援を戴いて、昭和二十八年十一月三日に発足し、三島学園の精神的支柱であられた秋葉安太郎先生を初代の会長とした。

秋葉先生亡きあと、同窓会の衆望を荷って種房繁氏が会長に就任し、早くも同窓生から初の会長誕生となった。

各役員もよく会長を補佐して、多忙な各自の仕事の間を縫って、毎年十一月三日、恒例の大学祭の際の総会、奨学金の給付、学園歌集の発行、同窓会報の発行等地味ながらたゆまない活動を続けてきた。

特筆するとすれば、四十三・四



出深い建物である。

近代的な鉄筋コンクリートに囲まれた学園の中にあつて、希望の森、思索の森と同じように学生自身に救いを与えてくれるものと信じている。

また学園を再び訪れる先輩諸氏にも心の故郷としての感動を呼びさますであろう。

さて、三十周年を目指しての同窓会の充実とは何をなすべきだろうか。

三十周年を迎えるにあたって

奥田吉郎

三号までの同窓会報に寄せられた「会員の思い出」を読み返してみると、それが求められた表題のせいかもしれないが、学生時代の回想につぎるようだ。

先ず学園の回想が何と云つても同窓生の原点であろう。

学生時代の追憶をより鮮明にするために、同窓生の消息を明らかにしてゆく、恩師の近況を紹介してゆく、学園の移り変りを知らせつつ現況を認識して貰う。

この建物は、日本大学のみならず、鋸坂にたてられた旧九部隊の歴史をとどめ、学園の事務所として、学園の中心をなしてきた想

学生時代の想い出から出発し、同窓生の結びつきを深くし、三島学園の発展を願う姿へ共に歩みたいものである。

その流れを扶けるものは、先ず同窓会名簿の作成だろう。

すでに二万を超し、全国各地に点在する同窓生を追いかけるのは、限られた予算、限られた人員での作業として不可能に近いかもしれない。

しかし、三十周年を目的として

在学時代の原簿を活用するだけでも、同級生の氏名、出身地が判明してくる。

次に同窓会報の充実であろう。年二回発行を定着させ、春の新入生の入学時と、秋の大学祭における同窓会総会とタイミングを合せ、現役の学生に同窓会の存在を知って貰う機会とし、総会の際のお土産の一つに考えたい。

最後に、前述した旧事務所を、同窓会館とし、記念品の展示、同窓生の団集の場としたい。普段は教職員の福祉施設として併用してゆけば建物自身も生きてくる。

同窓会の使命・役割は、果てしなくまた大きい。狂乱物価の影響は、同時に同窓会の台所にも及んでくる現状の中で、三十周年と云う大きな「くぎり」を目指して、新たな勇気と活力を見出して同窓会の発展につくそう。

(日本大学三島同窓会副会長)

三好先生のノート

青木久尚

(日本大学文理学部三島・教授)

今年も、はや大学祭を迎える季節となつてしまった。いわし雲の美しい空を見上げながら、校庭に

ひとり佇んでいると、木々の葉もいつしか黄ばみはじめたことに気づき、大自然の妙味に魅せられて

いく感じである。このような時、ふと思ひおこされるのは、いまは亡き三好晋教授のありし日のことでもある。

いまでも、「おい、青木君」といって、あの美しい白髪に夕陽を一ばいに浴びながら、希望の森の小径から出てくるような感じがするの、私ひとりであろうか。

先日、三好先生のお宅へお邪魔をいたし、先生の数多い蔵書の整理をさせていただく機会を得た。その時のこと、私は先生の書棚の片隅から、表紙の古びた六冊の本をみつけ、何の気なしにその本をひもどいてみて、思わず驚きの声をあげてしまった。それは、先生が東大の理学部動物学科の学生であつた頃、教えを乞うた各教授の講義を書きとどめた二十数冊のノートを製本したものであつた。先生の几帳面さを物語るきれいに揃つた小さな字と、すばらしい筆さばきで書かれた見事な図によって、

ぎつし埋められた先生のノートは、みるひとをして感嘆の声をあげさせ、また、先生のご性格をうかがい知るのに十分なものであつた。先生の若き日を物語るこのノートは、ご家族のかたがたも、一度も目を通しておられなかったという。誰にも誇りたがらない先生のお人柄に、ただただ敬服の念を抱くばかりである。

大学では、冗談を交えながら先生がたと語り合い、卒業生やわれわれのよきアドバイザーであつた三好先生が急逝されてから、まもなく一年になろうとしている。一周忌には、先生がもっとも親しんできた相模湾を一望に俯する小田原市の小高い丘の霊園に、ご家族や多くのひとびとに見守られながら納骨されるという。三島同窓生の皆様とともに、先生のご冥福を祈る次第である。

(写真・青木久尚教授)



クラ連・学友会のOB会を開催

学園紛争後成立したクラス委員連絡会議と学友会両執行部OBの集いが、十一月三日の同窓会懇親会終了後、市内「いわい」で開催される。紛争後の大学祭開催など、学生の先頭に立って活躍したメンバーの集まりだけに、その発展は同窓会の発展にもつながるもので大いに期待される。

同窓会一年間の主な事業

- 一、奨学金を四名の後輩に給付し、同窓会賞を六名の後輩に授与
- 一、学園歌集三〇〇〇部を発行付
- 一、三島学園の新生入生に配付
- 一、会報五〇〇〇部を発行(十一月三日)
- 一、総会並びに懇親会を開催(十一月三日)

第一回小員委会

三月十九日、三島学園内で全委員が出席して開催された。事務局よりの現況報告の後、同窓会賞の設置と奨学金を増額し、金参万円とする件を決定し、種房会長に答申した。

第二回小委員会

十月七日、長泉町ます半にて開催された。奥田、西村、宮沢、瀬川、石川の各委員の他藤岡助教に出席をお願いし、会報の発行についても種々打合せが行なわれた。今回はとくに総会並びに懇親会開催の件、会員名簿作成事業の取扱いの件が中心となり、これについては来る総会に提案されることになっている。

吾が歩み

杉山吉房



康であれば、どんなものでも、美味しく、いただけるものだ。又心もしかりである。観るもの、聞くもの、皆ことごとく、血となり、肉となるはずだ。学泉寮と言えは、兵舎の跡の佗住居であったが、私にとっては金殿玉楼にも、またた思ひ出多き場であった。

人生は前に進むのみと、がむしやらに、生きて来たが、四十才の、声を聞くようになると、学生時代のことが、ひとしお、なつかしく思ひ出される。中学時代は、学業を、おろそかにして、柔道に明け暮れ、心ならずも、喧嘩太郎の異名を頂戴した。一念発起して、昭和二十三年春、希望に燃えて、九州は福岡県立若松中学校より、日本大学三島予科文科に、入学した。入学と同時に、学泉寮に入寮し、南寮に寄宿することになったが、当時は終戦直後の苦難時代で、衣食住、すべてに、こと欠いでいた。先ずは、食べることに追われていた時代である。常に空腹であった。「すき腹に、不美味ものなし」と云う如く、身体が健

ければ、鬼神も裂く」と云うが、常に勇猛果敢に攻めて来た。私の勤務している大成建設には、社員総数九千名の内、日大同窓生が、約一千名の多くをしめている。現在大成桜門校友会を設け、今春大学本部に設置承認を受けた。当社に於ける、日大同窓生の活躍ぶりは、目をみはるものがある。私も当会の幹事として、その一役を担っている。今日のように、物価狂

大学祭によせて



乱の時代には常に、不安に苛まれているが、しかし、徒に之を悲観したり、あきらめてはならない。大いに努力奮闘して、より住みよい社会を建設し、幸福な生活が出来るよう満身の努力をすべきである。終りに日大三島同窓生の御多幸を祈る。

(昭和23・24・25年度在学 大成建設株式会社 東京支店 不動産課長兼都市開発課長)

丸山晴美

デリックな柄のジーパンとよれよれの汗くさいTシャツ。サンダルをバダバダさせながら、講義時間の半分以上すぎた教室に駆け込み終了のベルと共にマッパで教室を

とび出したものだった。夜風が身にしみ、ふるえている私に、ダボダボの学生服を頭からかぶせてくれたのはいいが、何年も洗っていないような異臭に思わずむせんだこともあった。

食糧事情の世界的悪化は我々にも及び、弱肉強食なるもの、動物社会のみならず、実行委員会にもその傾斜はみられ、仲間の男の子

アメ色に色づいた近所の柿の実を、折あらばとねらう頃になると今年も大学祭の時期である。二年間の在学中の想い出は数多いが、その中でも大学祭の想い出は鮮烈である。細身の体にムチ打って、仕事の合間をぬっての講義への出席。トレードマークのサイケ

たちの食欲のすさまじさに、啞然としている間に、山とあったおにぎりやパンが、あとかたもなく消え去り、無念の涙にくれたことも度々である。

もっとも、豚汁の野菜を食べすぎて、胃がいれんをおこしたのは、他ならぬこの私ではあったが……(そういえばあれ以来、豚汁は食べていない……)

男も女もなく、ただ大学祭を成功させようと共に苦勞してきた仲間達との出逢い。それは、私にとってかけがえのないものであった。ふだんは、女性ホルモン欠乏症とか、胸ベッタ、なんて平気でからかう連中が、胃をおさえてうずくまっている私にいろいろ気を使ってくれて、親身になって看病してくれたものだった。

あの時ほど、仲間のおもいやりがうれしかったことはない。

あれから一年。時はうつろい、星はかたちを変え、人も成長していいはずであるが、大人への脱皮を宣言したにもかかわらず、『丸山晴美を守る会』なんぞを結成してくれたかわいい後輩たちと今だにジャレあっている今日この頃である。

(昭和49・48年度短大国文在学、日本大学三島・学生課勤務)

三桜会

ペルー・アンデス「アルパマヨ」北西稜初登攀

ペルー・アンデス 遠征報告

一九七三年四月十五日
～九月二十二日



遠征隊員(左から) 溝淵・三輪・小田・山口・加藤

三桜会遠征隊

隊長 三輪健一郎
昭和四十六年経済学部卒業
鎮長泉鍍金工業所(自営)

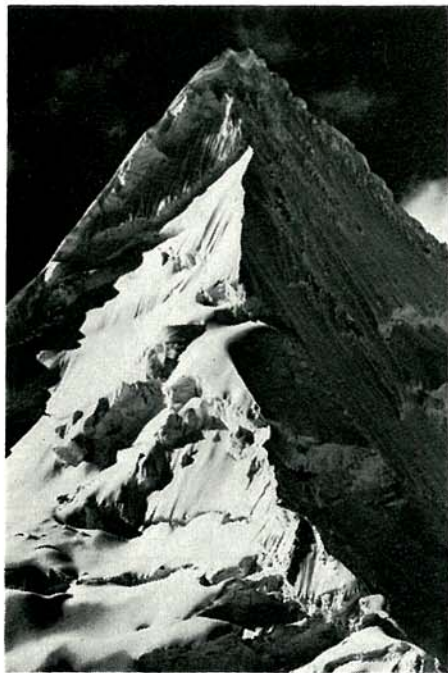
三島学園山岳部OBの団体である三桜会の行事として行なわれた。ペルー・アンデス遠征は見事にアルパマヨ北西稜初登攀をなしとげた。今般同登頂の成功を記念して、十月三日より八日まで沼津市の富士急百貨店で登頂記念展が開催され、その記録写真が初公開された。本会事務局にもその貴重な写真が寄せられてきたので会報に掲載し、その成挙をたたえます。

副隊長 溝淵三郎
昭和四十六年理工学部卒業
田中工業 鎮
隊員 小田鉄次
昭和四十七年法学部卒業
鎮九一工業(自営)

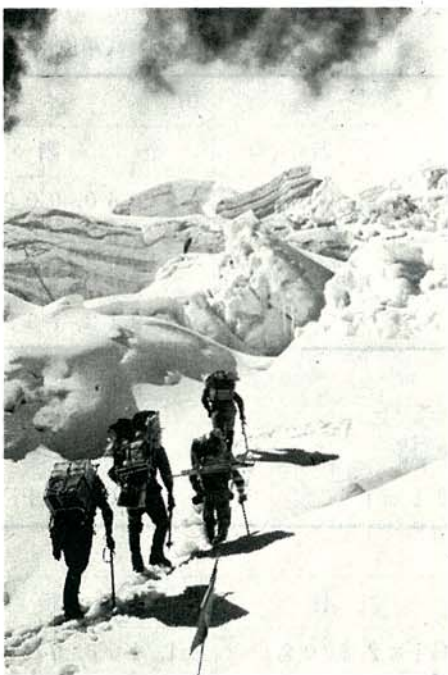
隊員 山口佳苗
昭和四十六年短大建築科卒業
東興電機 鎮
隊員 加藤千統
昭和四十八年経済学部卒業
名古屋宝業 鎮



アルパマヨ登頂



アルパマヨ北西稜



ベイリー氷河を進む
キャンプ5400m目指す

四月十五日 先発隊二名CPALにて羽田出発(バンクーバー)～メキシコ～リマ
五月六日 本隊三名CPALにて羽田出発(バンクーバー)～メキシコ～リマ
五月二十八日 ラウラ山群にて高度順化および氷雪技術等のトレーニングを行う
六月一四日 ラウラ発(リマ)着
六月二〇日 夜リマ発、バスにて登山基地の町ワラスへ
六月二六日 ワラス発トラックにゆられてアッシェンダ・コルカスへ
六月二七日～二九日 キヤラパン開始アッシェンダ・コルカス～インカシ～アルパマヨ谷～ベイリー氷河BC
七月三日 第一キャンプ設営(五〇〇〇m)
七月七日 第二キャンプ設営(五四〇〇m) 北西稜末端
七月一〇日 頂上アタック北壁ルート・三輪・溝淵・山口隊員西壁ルート・小田・加藤隊員
七月十一日 ネバド・アルパマヨ全員登頂(六一〇〇m)
七月二八日～八月四日 リマにて隊荷を整理し最後の登山活動であるセントフル山群の入山準備をする
八月一二日 ネバド・アンタッチャイレ(五六六〇m) 登頂
八月二一日～九月一七日 ペルー国内旅行・インカの遺跡見学・アマゾン見学帰国挨拶回り
九月二二日 帰国・リマ～ロサンゼルス～ハワイ～羽田

昭和47年度収支決算書

(昭和47年4月1日～昭和48年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨 学 金 (20,000円×5名)	100,000	会費収入 (200円×3,045名)	609,000
学 園 歌 集 発 行 費	587,400	利 息 収 入	278,418
同 窓 会 報 発 行 費	68,250		
各 科 同 窓 会 補 助 費	10,000		
総 会 並 び に 懇 親 会 費	109,367		
会 議 会 合 費	4,000		
通 信 運 搬 費	12,380		
雑 費 (消耗品、旅費、慶弔、雑費)	10,400		
計	901,797	計	887,418
基 金 繰 入 額	0	基 金 取 崩 額	0
次 年 度 繰 越 金	353,739	基 前 年 度 繰 越 金	368,118
合 計	1,255,536	合 計	1,255,536

貸 借 対 照 表

(昭和48年3月31日現在)

(単位 円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	413,739	基 金	5,560,000
定 期 預 金	5,500,000	基 前 年 度 繰 越 額	5,560,000
		次 年 度 繰 越 金	353,739
合 計	5,913,739	合 計	5,913,739

昭和48年度収支予算書

(昭和48年4月1日～昭和49年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨 学 金 (20,000円×9名)	180,000	会費収入 (500円×2,800名)	1,400,000
学 園 歌 集 発 行 費	700,000	利 息 収 入	280,000
同 窓 会 報 発 行 費	170,000		
各 科 同 窓 会 補 助 費	50,000		
総 会 並 び に 懇 親 会 費	130,000		
会 議 会 合 費	20,000		
通 信 運 搬 費	40,000		
雑 費 (消耗品、旅費、慶弔、雑費)	50,000		
予 備 費	150,000		
計	1,490,000	計	1,680,000
基 金 繰 入 額	440,000	基 金 取 崩 額	0
次 年 度 繰 越 金	103,739	基 前 年 度 繰 越 金	353,739
合 計	2,033,739	合 計	2,033,739

昭和48年度収支決算書

(昭和48年4月1日～昭和49年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨 学 金 (30,000円×4名他)	153,000	会費収入 (500円×2,873名)	1,436,500
学 園 歌 集 発 行 費	699,500	利 息 収 入	263,620
同 窓 会 報 発 行 費	82,000		
各 科 同 窓 会 補 助 費	90,000		
総 会 並 び に 懇 親 会 費	87,815		
会 議 会 合 費	0		
通 信 運 搬 費	3,440		
雑 費 (消耗品、旅費、慶弔、雑費)	52,900		
予 備 費	0		
計	1,168,655	計	1,700,120
基 金 繰 入 額	740,000	基 金 取 崩 額	0
基 次 年 度 繰 越 金	145,204	基 前 年 度 繰 越 金	353,739
合 計	2,053,859	合 計	2,053,859

貸 借 対 照 表

(昭和49年3月31日現在)

(単位 円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	619,204	基 金	6,300,000
定 期 預 金	6,500,000	基 前 年 度 繰 越 額	5,560,000
		本 年 度 繰 入 額	740,000
		前 受 金 (49年度会費)	674,000
		次 年 度 繰 越 金	145,204
合 計	7,119,204	合 計	7,119,204

昭和49年度収支予算書

(昭和49年4月1日～昭和50年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨 学 金 (30,000円×9名)	270,000	会費収入 (500円×3,100名)	1,550,000
学 園 歌 集 発 行 費	700,000	利 息 収 入	450,000
同 窓 会 報 発 行 費	200,000		
各 科 同 窓 会 補 助 費	100,000		
総 会 並 び に 懇 親 会 費	150,000		
会 議 会 合 費	35,000		
通 信 運 搬 費	40,000		
雑 費 (消耗品、旅費、慶弔、雑費)	70,000		
予 備 費	150,000		
計	1,715,000	計	2,000,000
基 金 繰 入 額	300,000	基 金 取 崩 額	0
基 次 年 度 繰 越 金	130,204	基 前 年 度 繰 越 金	145,204
合 計	2,145,204	合 計	2,145,204

桜文会だより

(文科同窓会)

宮 沢 愛 子

短期大学部文科同窓会を、「桜文会」と名称し、発足して今年で五年目となります。発足当時は、

なにをどうしていいのやら、これから先どうしていけばいいのかわからないことばかりでした。

気がついてみると、とにもかくにも、年月だけが過ぎ去っていたという感が致します。

桜文会の年中行事は、目下のと

ころ、桜文会総会の開催と、会誌「桜文」の発行です。

年間一冊の小冊子ですが、三月には第五冊目を数えることができました。

文科の諸先生には、近況談のみならず、日頃御精進の研究の紹介、外国留学の記等々の原稿を、毎号お寄せいただいています。女性だけの会誌であるという心遣いのあふれた文章からは学生時代に学んだ事柄や、諸先生方のお人柄がうかがわれ、懐しい気持ちでページを操っている会員も多いようです。

又、会員の近況報告も、職場での経験談や、外国旅行の話、新婚生活のほはえましい暮らしぶりなど人によってさまざまな人生の一端が、誌面をにぎわしています。

会誌発行と同じくして、三月二十一日、第五回同窓会総会並びに懇親会を、田代グランドにおいて、文科の諸先生方の御臨席をえ、開催致しました。

石田雅子(英文四期)の挨拶に始まり、新会員を代表して、谷村美佐子(国文七期)さんに記念品が贈呈され、石瀬由美子(英文七

期)さんが謝辞と抱負を述べました。続いて、内山先生に御祝辞をいただき、なごやかに懇親会が進められました。ひさびさにかつての師・級友・先輩・後輩を会しての集いに、楽しかった学園生活の話や近況談に話しの花を咲かせました。今回は、特に西村先生からノースカロライナ大学の校歌を下敷にして作られた「わが母校ー日本大学三島」の歌の紹介があり全員で合唱したのも、忘れ難い事となりました。不安と期待の入り混じった歓声の中で開けられるユ一モアあふれる品々のプレゼント

交換も、恒例となりました。最後に校歌をうたい、来年の再会を約束して、和気あいあいの内に無事終了致しました。

桜栄会だより (家政科同窓会)

私達、桜栄会では入会員第十四期生(一七〇名)を迎え、全会員一九六一名となり、ますます大きな輪と成りつつあります。

第十四回桜栄会総会は、三月二十一日、レストラン・『じゅん』において開かれました。平井会長

の歓迎のあいさつに始まり、桜栄会より新入会員に記念品が贈られ

続いて年間報告、会計報告など次々と進められました。

後半は、山本家政科長を始め、岩田・小佐野・斎藤・服部・浅野・安原の七先生を囲んでの懇親会に入り、諸先生方のスピーチや御自慢ののどに耳を傾け、久しぶりの対面に時のたつのも忘れるほど和気あいあいと楽しく過ごしました。今回は、子供連れで出席された先輩も多く、閉会后、胸にカーネーションのコサージュを付け、お母さん

をひかれて帰る子供の姿が印象的でした。

第五回総会



第十四回桜栄会総会「じゅん」で開く

